

佳作

笑顔は世界を変える

秋田県立秋田南高等学校中等部

2年 渡辺 優香

4年前の今頃、どんな日常生活を送っていたか覚えているだろうか。

世界で新型コロナウイルスがはやり始め、感染拡大が懸念される状況の中で、張り詰めた生活をしてきた。戸惑いながらも慣れないマスクを着けて生活していたことを、今でも鮮明に覚えている。

当時小学生であった私は、コロナ対策で失ったものが多いように感じた。

まず、毎日楽しみにしていた給食の時間が黙食になったこと。以前は机を向かい合わせ、お互いの顔を見ながら会話を弾ませていた。だが、黙食が徹底され始め、皆が黒板を向き無表情で食べるようになった。今までの給食の時間がとても恋しくてたまらない。食器の音だけが聞こえる静かな教室が、寂しく感じられた。

そして、マスクによって友達や先生の表情が分からなくなったこと。マスクを着けていると口元が見えない。そのため、心の底から笑っているのか、愛想笑いをしているのか、見分けがつかない。相手の表情を読み取ることができなくなり、誰かとコミュニケーションを取ることの難しさを感じる。さらに意思の疎通を図ることに対して、苦手意識を持つようになってしまった。

他にも、毎日ニュースで感染者数を公表すること。人と距離を置くように、ソーシャルディスタンスが徹底されたこと。さまざまな制限が私たちの自由を奪っていった。

人々の間に距離ができ、恐怖に包まれているような感情を抱き始める。毎日がモヤモヤとしていた。この状況を一言で表すとしたら憂鬱。この言葉に限るだろう。明るかったはずの日常が、コロナによって黒く塗りつぶされたようだった。だんだんと皆の表情から明るさが消えていったようにも思えた。このように感じていたのはきっと私だけではないだろう。コロナ生活にも疲れ、気付いた頃にはストレスを抱えていた。

これまでの4年間で、私は失ったものだけに目を向けていた。しかし、つらい時期を乗り越えたからこそ、見つけたものがある。お互いの表情が見え、喜ぶ姿はこんなにも輝かしいものだったことを……。

それは、1年前の小学校の卒業式のことだった。ずっとマスクを着けて生活していた私たちは、合唱の練習でもお互いの表情が見えないまま歌っていた。気持ちを込めて練習していたが、表情が見えない、声が聞こえづらいなど、ど

こかぎこちない雰囲気は漂う。歌うことが好きな私は、思い切って歌えないこの状況が嫌だった。

そして当日。マスクを外してもよいという許可が下り、皆が一斉にマスクを外した。恥ずかしがりながらも久々にお互いの顔を見合わせる。一瞬、元の日常に戻れたような気がした。合唱が始まり、いつも以上に大きな声が体育館中に響き渡る。皆と過ごした6年間。さまざまな思い出がよみがえり、思わず涙が込み上げてくる。辺りを見渡すと、保護者がハンカチで涙を拭いていた。

式が無事に終わり、皆が玄関に集まる。思い出話をしたり、写真を撮ったりと、有意義な時間を過ごした。すると、皆は満面の笑みを浮かべていた。卒業式という特別な日に皆の輝く笑顔を見ることができ、感慨深い気持ちになった。心が温まったような気がする。自然と私は笑顔になっていた。

コロナによって見えなくなった表情や、希薄化してしまった人と人とのつながり。この経験があったからこそ、笑顔が大切だということに気付かされた。

明るい表情で会話をすると、その場の雰囲気が明るくなり場が和むように、笑顔には人の心を動かす力がある。私は、周りからいつもたくさんの笑顔というエネルギーをもらっていた。皆の輝く笑顔を見て、私は頑張れるのだ。

中学生になり、生徒会に入った。生徒会では、活動の一つとしてたびたび、朝に挨拶運動を行っている。目的は、朝から元気に挨拶することで学校に活気をもたらし、元気に一日をスタートするためだ。朝、生徒玄関前で私はマスクを外し、一人一人の顔を見て笑顔で挨拶をする。すると、相手も笑顔で返してくれた。話したことがない相手でも、心を通わせることができ、お互いうれしい気持ちになれる。

これからは、私が皆に元気やエネルギーを与えられる存在になりたい。意識一つで世界は変えられる。笑顔で溢れる明るい世界であるために。